

ちよあ

第6号 (1999年12月)



夜毎ライトアップされてお濠を照らす



重要文化財に指定された明治生命本館

千代田男子五十名 武道館に吟ず

次なる目標は女子五十名との二組揃いぶみ

会長 飯田龍鷹

我国、伝統文化の大殿堂日本武道館で、鶴翼の陣の画をバックに、千代田男子五十名は凜として立つた。時維、平成十一年十一月十四日十一時、その姿は経済大国日本を成し遂げた戦士達の群を抜く風格であった。

そもそも千代田岳精会の武道館出場は、一年前の発会式即ち百名達成記念大会に始まる。

各教場は分かれても、仲よく楽しく一体感をと、合吟出場を決定した。更には、二十年前から宗家の言われる「独吟コンクールも錬磨研鑽の意味ではよいけれども、吟界の目指すは富士山の頂上ではなく、大きな裾野を拡げることだ」との言にも起因する。

詩吟三百八十万人の合吟の広がり、それが頂点の高さを作っている。裾野の広さが重要である。「合吟こそ最高」これも宗家の言葉である。合吟には沢山の人の聲が混じり合い、溶け合って作り出す響きがある。一人ひとりの聲がまじり合い、とけ合うのである。コーラス指揮者の関屋晋先生の言によれば「夫々の人の声には、どの人の声もその人にしかない響き

がある。自分の聲が好きになって、周りの声と一緒にいる事が大切」と。

次なる千代田の目標は、会員二百名を達成し、その暁、男子五十名女子五十名の二組揃いぶみで、晴の武道館に立ちたいと希望している。

合吟練習三ヶ月、その間の合言葉は、一聲一心、口を大きくあけ元氣よく、とめをしつかり、で全くの基礎的なことでしたが、三ヶ条とも、他の五十六チームを凌駕する頑張りと自負している。但し、指揮者としては、誠に大事な役目への反省点がある。それは、「楽しく」の言葉が足りなかった。為にリラックスせず、音程一本の上りをなし、誠に申し訳なかつたと思っている。

平成十一年度千代田岳精会温習会は、十月十六日(土)、午後〇時から、中央区八丁堀の「労働スクエア東京」で開催されました。一年納めの会に相応しく、吟友百人が相集い、盛大な吟の競演が繰り広げられたのです。

吟友百人 感動と楽しさの千代田温習会

棹尾を飾った前沢龍淳先生の吟二題

鈴木重風

当日は、本部婦人部長 前沢龍淳先生の特別ご参加も頂き、一層の華が添えられました。

で高らかに吟じ終え、新たな感動に浸ったひと時でした。

吟詠の部は、司会 耳塚昇山・村井蓉子、伴奏 村上恒山・萩裕泉の各氏が担当、第一部独吟発表(無伝の部)では、二十六人の各教場代表が日頃の精進の成果を披露し、見事な吟詠振りに会場から温かい拍手が送られました。

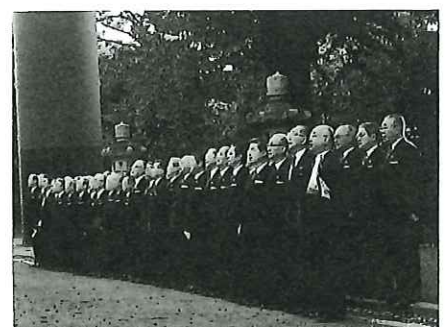
第四部教場別合吟、そして第五部教場長(代行)吟詠と一年納めに相応しい味吟、力吟の連続でした。第六部では「武道館大会」出吟者五十名による「九月十日(菅原道真)の大合吟を披露、それまでの練習成果が披露されました。

続いての第二部では、飯田龍鷹会長による合吟研修が行われ、「燕の詩 劉叟に示す」(白居易)を、会長の熱意溢れるご指導のもと全員

赤根惇泉氏の司会により賑やかに進行され、自作句の吟詠あり、教場歌の披露あり、舞踊ありで時の経つのを忘れさせる楽しいひと時でした。



武道館への聲(一心)



靖国神社大鳥居前で早朝の合吟練習

軌道に乗って来た三年目

吟行旅行 温習会 そして教場讃歌

町田 勇

神田教場の開設は三年前の平成九年一月十四日。会員数は当初五〇六名、それが現在は十五名、男性八名、女性七名という構成で出席率もきわめて高い。教場はJR秋葉原駅から徒歩約三分の「ふれあい会館」である。

二周年を機に「神田教場讃歌」をつくり、平成十一年一月二十二

日の温習会では、千代田岳精会の諸先生、他教場の吟友、来賓諸生のまえで披露。温習会の評判はよかつたようである。

また神田教場では平成十年、十一年と吟行旅行をした。十年に回った甲州信州路のモチーフは島崎藤村で、十一年六月に行った上州路のモチーフは若山牧水でした。

とくに牧水詩碑のハイライトといえは暮坂峠の「枯野の旅」であった。当日は郡司先生(渋川岳精会)



「枯野の旅」を合吟

新たな希望と えもいえぬ充実感

ふれあい橋 そして神田川の流れ

神田教場長 林 吾風

三周年を迎え運営体制も軌道に乗りました。全国研修会への出席、吟剣コンクールにも積極出場、二年連続全員入賞の快挙を果たしました。コンダクターの勉強もやります。吟行会、温習会等を通じ、他教場会員との交流も深めています。

教場の帰途、ふれ 橋から仰

ぐ星月、静かな神田川の流れに、えもいわれぬ充実感が胸底に満ちてきます。



神田教場讃歌

林 吾風 作詞

- 一 その名もゆかし神田川
ふれあい橋のたもととなる
この学舎に集い来て
詩歌吟じて楽しまん
熱き心の我が吟友よ
心の琴線ゆする吟
賢聖英傑との出会い
この喜びと感動を
- 二 心の糧とはくくみで
響く吟声天までも
八咫の鏡に精の文字
胸に輝く誇りあり
かざす極致は真善美
深き吟縁感謝して
燃ゆる吟魂千代までも
- 三

◎詩吟上達アラカルト④

主音にかえる

詩吟の特長の一つは、主音が③(ドレミの③)であることです。そして詩吟には「主音にかえる」という大原則があつて、必ず主音③を、終わりの音位とします。一曲の終わりが主音であるばかりでなく一句の最後のことも主音です。主音にかえることは、詩吟の旋律に落ち着きを与え、聞く人の気持ちをしずめ安らぎを与えます。

詩吟の旋律は

高音部へ上つては主音にかえり低音部へ下つては主音にかえること、かえしなのです。

井のなかの蛙

福島越山

神奈川県吟剣詩舞道連盟のコンクールに二年連続挑戦した。予選出場前、飯田会長から①風邪ひくな②二三日前から声出しを抑える③煙草・酒は飲むな④外出帰宅直後うがいせよ…の注意を戴いた。

決戦のときは予選よりも緊張した。出番待ち(舞台横)の時、前の人の欠吟や誤読・絶句で出番時間が早くなりやしないかとかマイクの高さ調整が気になった。肩の力を抜け、平常心でのぞめ、とかいうことは、簡単でないと痛感した。

しかし他流試合によつて、発声・音程・アクセント・詩心表現・礼節をわきまえた態度などの大切さを再確認できたのも、たしかだ。

編集後記

光陰矢の如し、あつという間に99年は過ぎ去ろうとしています。千代田岳精会にとつてこの一年は実に捻り多いひととせであつたと思ひます。

七教場それぞれに日夜研鑽に励み、拡大の一途を辿っていることも喜ばしい限り。この勢いを二千年に持ち込もうではありませんか。